

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380264

研究課題名(和文) 啓蒙思想家としてのヒュームとルソーの比較思想史的研究

研究課題名(英文) Comparative Intellectual History of Hume and Rousseau as Enlightenment thinkers

研究代表者

壽里 竜 (SUSATO, Ryu)

慶應義塾大学・経済学部(三田)・教授

研究者番号：20368195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：4年間の当該研究期間を通じて、国際学会での2回の報告(Hume Conference, ECSSS/ASECS Annual Meeting)、国際学術誌に3本(うち1本は近刊)の査読つき論文(Hume Studies, Modern Intellectual History, European Journal of the History of Economic Thought)を公表することができた。また、2015年に出版した拙著の一部に当該研究課題の内容を盛り込むこともできた。当該研究期間中に行った資料調査等の成果をすべて公表できているわけではないので、今後も論文による公表に努めていく。

研究成果の概要(英文)：During 2014-2017 I presented papers in two international conferences (Hume Conference in 2014 and ECSSS/ASECS Annual Meeting in 2016), and published three papers (one of which is forthcoming) in international journals (Hume Studies, Modern Intellectual History, and the European Journal of the History of Economic Thought). A part of this research project is also contained in my book published in 2015. As I have not yet published some part of the resource research made during this term, I endeavor to publish it further.

研究分野：社会思想史

キーワード：啓蒙思想 ヒューム ルソー 文明 奢侈 エピキュリアニズム エピクロス主義

### 1. 研究開始当初の背景

これまで、デイヴィッド・ヒュームとジャン＝ジャック・ルソーという、18世紀を代表する二人の偉大な思想家については夥しい数の個別研究が行われてきた。また、両者の関係についても、18世紀の思想界の最大のスキャンダルとも言える両者の決裂という観点から論じられてきた。だが両者の関係が、そのような伝記的エピソードとしてのみ語られてきたために、両者の思想を比較・検討した研究はほぼ皆無と言っても過言ではなかった。

しかし、ほぼ同時代を生きたヒュームとルソーの間には、その思想内容についても、思想家としてのスタイルにおいても、また後代の両義的な評価という点においても、実は多くの共通点が存在しているのではないかと。研究代表者は、これまで思想史的観点からヒューム研究を行う中で、フランス啓蒙思想との関連でヒューム思想を捉えるようになり、こうした着想を得るにいたった。

### 2. 研究の目的

以上の点に照らして、本研究は、ヒュームとルソーについて個別に行われてきた思想史研究の知見を踏まえつつ、個別研究の枠を超えた比較思想史の観点を導入するものであった。より具体的には、ヒュームとルソーの間に見られる、比較に値する共通点を析出し、両者が共有する思想的起源から、両者の相違点と共通点とをより詳細に描き出すことを目的としていた。加えて、同時代人の書簡、パンフレット類も重要な証言として考察しつつ、ヒュームから見たルソー、ルソーから見たヒューム、さらには同時代人から見た両者の思想に対する評価などから、同時代の知的文脈を再構築し、最終的には18世紀啓蒙思想の広がりやを再検討することを目的としていた。

### 3. 研究の方法

ほぼ同時代の思想家の比較には様々なアプローチがありうる。中でも、相互の思想的影響を検討することは重要である。事実、ルソーと他のスコットランド啓蒙思想家との比較は国内外で行われてきた。たとえば、ルソーがアダム・スミスに与えた影響は内田義彦が『経済学の生誕』において先駆的に検討してきたし、近年ではデニス・ラスムッセンの研究 (Denis Rasmussen, *The Problems and Promise of Commercial Society, Adam Smith's Response to Rousseau*, 2008) が記憶に新しい。また「スコットランドのルソー」といわれたアダム・ファーガソンについても、同様である。1750年代後半になって著述活動を始めたスミスやファーガソンは、スコットランド啓蒙の思想家としてはヒュームと「同一世代」として括られることが多いが、スミス/ファーガソンとヒューム/ルソーの間には約十年の年齢の開きがある。それに対して、ヒ

ュームとルソーが運命的な出会いを果たしたのが、とくにヒュームがその晩年の主著とされる『イングランド史』を書き終えた後だった、という点にある。ルソーについてもそれほど事情は変わらない。死後出版となった『告白』や、相対的にマイナーな作品群は別にして、初期の『人間不平等起源論』は言うに及ばず、『社会契約論』や『エミール』(1762年)なども、ヒュームと出会った時には発表済みであった。それでは、ほぼ同世代であり、ほぼ同時期を生き、それぞれが主要な著作を発表した後で出会い、最終的に決裂した二人の思想家を比較することはいかにして可能かつ有益となるのだろうか。

第一は、それでもなお残る「相互の影響」である。ヒュームが書簡で繰り返し述べているように、近代の印刷術の目覚ましい発展は、思想家たちにその著作の頻繁な改訂作業を可能にさせた。実際、ヒュームは『イングランド史』出版以降、「統治の起源について」を1770年に『論集』に加えた以外には新しい著作を書いてはいないが、『論集』『人間知性に関する探究』『道徳原理研究』『イングランド史』を何度も版を変えて出版し、そのたびに少なからぬ改訂作業を加えているのである。それらの改訂作業にルソーとの出会いと決裂がまったく反映されていないと考える方が不自然であろう。

加えて、両者の間には、自己規定を巡る共通点も見られる。ルソーもヒュームも「自分をどのような人間として描き出すか」ということに尋常ならざる注意を払っていた。ヒュームが友人を通じて自らの潔白を証明しようと躍起になったことも、ルソーがその件については何も語らないことによって「無垢の被害者」としてふるまったことも、著述家として身を立てることが可能になった彼らの世代において、彼らがいかに世間で作られる自分の人物像に敏感だったか、ということを書きしている。これこそ、啓蒙の世紀においてはじめて登場した「思想家」としての両者の共通点なのである。

両者の比較考察が重要である第二の点は、影響関係がなくとも、思想家としての両者の比較は両者に共通する思考の枠組みを明らかにするという点で重要だ、ということである。ルソーはその挑発的なスタイルで世間に知られるようになったが、これは『人間本性論』でヒュームが採った戦略と同じである。さらには、ヒューム自身が大仰な逆説を語るこの効果について、『人間本性論』の中で語っているのである。そう考えてみると、これほど同時代人たちから「逆説的 paradoxical」と評された二人の思想家の思想内容のみならず、そのスタイルについても、比較検討に値することは明らかである。

### 4. 研究成果

研究成果としては、以下に示す通り、英語での査読つき論文が3本(うち1本は近刊)

学会報告3回、図書1冊(ただし、当該研究に関わるのはこの図書の一部)であった。論文は、ルソーが自伝において残したヒュームの著作への評価を手がかりに、前者が後者の著作を深く理解していた、ということを示した文献的証拠から示したものである。重要な点は、ヒュームの経済思想の中でも、他のフランスの(経済)思想家たちが強い関心を寄せたわけではない点にルソーが着目していた可能性がある、ということである。具体的には、ヒュームの『政治論集』における共和主義的傾向(ルソーの生国ジュネーブへの肯定的評価)にルソーは着目しているばかりか、さらにはヒュームの『政治論集』を読んだ後、ないしはヒュームと個人的に知り合った後に、ルソーの残した草稿類に、ヒュームの貨幣数量説とよく似た議論、大国における奢侈の政治的価値を認める議論などが表れていることを明らかにした。論文は、ヒュームが『政治論集』(1752年)の末尾に置いた「完全な共和国に関する一案」という論説が、18世紀末～19世紀初頭のラディカルたちにどのように受容されたか、ということ論じている。本論において、ウィリアム・ゴドウィンがあるパンフレットの中でヒュームをルソーと並べて共和主義者として高く評価していることを示した。この点は、これまでのヒューム研究においては顧みられることがなかった点である。論文には、ルソーの名前は直接には登場しないものの、政治・経済を包摂するヒュームの社会思想における懐疑主義と、それにもとづく文明社会の不安定性の認識を強調しており、結果としてルソーとの共通点を示すことになっている。

学会報告は、主としてヒュームによる、文明社会における陰謀論の考察を通して、ルソーが申し立てていた陰謀論をどのように捉えたか、という問題を考察するものであった。ヒュームは『政治論集』では陰謀論を遅れた社会の特徴と見なしつつ、『イングランド史』では歴史上の陰謀論に与する人々を党派的な人物として批判している。その意味では、ヒュームが被害妄想に取り憑かれたルソーを「狂人」として切り捨てたことは容易に理解できる。だが、本報告では、ヒューム自身の書簡や自伝には、自らを陰謀の被害者とする見解が散見されることを示し、むしろヒュームとルソーの共通点を指摘した。学会報告は、本研究計画の内容を網羅するものであり、エピキュリアンとしてのヒュームとルソーの正義論と奢侈論を通じて両者の共通点を析出するものであった。学会報告は論文の基になったものなので割愛する。

図書の第八章は、ヒュームの「完全な共和国に関する一案」とルソーの『ポーランド統治論』とを、代議制を用いた大共和国の構想として比較検討するものであった。それ以外の章は、以前の科研費若手研究(B)(22730174)による成果であるが、本研究課題が開始した2014年時点で図書が執筆途

中であつたため、ヒュームとルソーの比較を部分的ではあれ盛り込むことができた。

それ以外にも、国際学会での報告を計画していたものの、(事前にフル・ペーパーを提出した上で審査を受けなければならない)学会報告の申し込みでリジェクトされたり、投稿論文の査読に予想以上の時間がかかったりなどしたため、必ずしも当初の計画通りに研究成果が出せたわけではない。ただし、当該研究期間中に行われた研究については、今後も国際学術誌などで公表していく予定である。

なお、研究代表者は平成26年度10月より半年間、パリ第一大学哲学部に招聘研究者としてフランスに滞在し、その間にフランスのヒューム研究者、ルソー研究者と本研究課題について意見交換する機会を得たこと、それらは上記の成果に反映されていることも付言しておく。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)(うち近刊1件)  
Ryu Susato, “How Rousseau Read Hume’s *Political Discourses*: Hints of Unexpected Agreement in Their Views of Money and Luxury,” *European Journal of the History of Economic Thought*, forthcoming. (査読あり)

Ryu Susato, “Hume as an ‘ami de la liberté’: The Reception of his ‘Idea of a Perfect Commonwealth,’” *Modern Intellectual History*, 13:3 (2016), pp. 569-596. (査読あり)  
DOI:10.1017/S1479244314000687

Ryu Susato, “‘Politics May Be Reduced to a Science’? Between Politics and Economics in Hume’s Concepts of Convention,” *Hume Studies*, 41:1 (2015), pp. 81-89. (査読あり)  
DOI:10.1353/hms.2015.0004

[学会発表](計3件)  
壽里 竜「啓蒙と陰謀—ヒュームとルソー—」アダム・スミスの会196回例会、2016年

Ryu Susato, “Two Epicureans in the Age of Enlightenment: Hume and Rousseau on Luxury and Happiness,” 29<sup>th</sup> ECSSS(Eighteenth Scottish Studies Society)/47<sup>th</sup> ASECS(American Society for Eighteenth-Century Studies) Joint Annual Meeting, 2016.

Ryu Susato, Invited Commentator for Book Panel “Author Meets Critics”: Andrew Sabl’s *Hume’s Politics: Coordination and Critics in the History of England* (with Willem Lemmens

and Mark G. Spencer), 40<sup>th</sup> Hume Society  
Conference, 2014.

〔図書〕(計1件)

Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment*,  
Edinburgh University Press, 2015, pp. 348  
(+xii) (当該研究に直接関わるのは第8章。  
それ以外は若手研究(B)22730174、2010-13  
年の研究成果)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

壽里 竜 (SUSATO, Ryu)

慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号：20368195

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )